

# 授業実践の様相—解釈的研究

—生活科「しぜんの生きものたんけん」の言語的トポス—

田 代 裕 一

An Interpretative Study on the Verbal Aspect of Lesson Practice :  
A Case Study on the Lessons of Living Environment Studies  
by the Method of HATSUGENHYO and the Map of Key Words

Yuichi Tashiro

## 1 研究目的

筆者が取り組んでいる授業実践の様相—解釈的研究とは、その授業での学習内容の展開とコミュニケーション過程との統一的表現、及びその解釈を目指すものである。これまで、この様相—解釈的研究を、主に社会科の分野での議論を中心にした授業を対象にして進めてきた<sup>1)</sup>。また、生活科を分析の事例に取り上げた場合もあったが、その際も比較的、社会的な領域を主にした実践であった<sup>2)</sup>。そこで、今回、生活科の中でも自然領域を主な対象とした授業を取り上げ、様相—解釈的な研究方法がどの程度、適用できるのか、その可能性を検討したいと考えた。さらに、以前は同一の授業者の授業を1回のみ取り上げることが多かったが、単元内での授業を複数回、みていくことで、学習内容の展開状況に関連的に把握することも試みてみたい。

現在、様相—解釈的研究では、「発言表」というツールを用いているので、以下、「発言表」の作成の手順について簡単に述べておく。発言表は基本的に、発言者名欄及び、発言状況欄からなる。発言状況欄には、授業記録上の各発言の長さを、縦の実線として記入する。本稿では授業記録での発言記録の二行分（一行…今回は34字程度）を実線の一単位分になっている。このように発言の長さを、アナログ量的に表現する<sup>3)</sup>。さらに、授業において用いられた「主要な

言葉」(授業の展開をとらえる上でキーワードとなる言葉として分析者が判断して選んだもの)を記号化して、その右横に載せている。これらの記号は、元の言葉がイメージできるように、類似性を重視して選んでいる。ただ、抽象的な言葉など、記号化がやや難しいものもあるが、このような言葉の記号化は、分析者の「センス」が問われるところであろう。なお、一回の発言の中で同じ「主要な言葉」が複数回用いられても、一回のみ、その言葉の記号を載せている。右側の発言内容の欄には、その授業での内容展開や言語的応答関係、その子どもの思考の特性、等を示す上で、重要と思われる言葉をそのまま抽出して記載している(一欄に最大14文字)。さらに、その右側に分節ごとに使用された「主要な言葉」を、アナログ的に集計して記載する欄を設けている。表はワープロもしくはパソコンで作成するが、今回は今後の教育現場での活用可能性や、また自然科学に近い内容でもあることを考慮し、(発言同士の関係といった、緻密な表現性の面ではやや課題があるが)パソコン(Excel)にて作成した。

なお、今まで授業事例の分析を積み重ねてきた結果、現在、この様相—解釈的研究は、(ギリシャ哲学の用語を借りて言えば)授業のロゴス *lóyos* (論理=概念)とパトス *páthos* (イメージ=情念)のトポス *tópos* (場=様相)を表現することもケースによっては可能ではないか、と考えるに至った<sup>4)</sup>。そこで今回、「発言表」に基づいて、このような授業の言語的トポスをより端的に示す図表を新たに作成して、検討してみたい。また、かつて筆者は、「発言表」による授業分析は、言葉の森の中にいる、キーワードとしての昆虫を探すようなもので、ある意味、昆虫の発見・採集に似た「苦労・楽しさ」を持つ作業であると、ある学会の課題別分科会での発表の際、比喩的に述べたことがあったが<sup>5)</sup>、今回は本当に色々な生きもの(を示す言葉)が授業記録のどこに存在するのか、探索することになった。

## 2 今回の分析事例

今回、取り上げるのは福岡県S小学校K先生の2年生活科の授業実践「しぜんの生きものたんけん～生きものクイズ大会をしよう～」(2005年6月15日・16日実施 児童37名…1名欠席)である。この事例を取り上げた理由は

以下のような点にある。少し前のものではあるが、詳細な授業記録や子どものカルテ（生活記録）が作られていること、子どもの発言が大変、多く、また自分の考えを素直に表現していること、単元全体をみても、調査・観察・議論といった各種の「アクティブ・ラーニング」的な活動を含むので、今後の「生活科」のみならず、教育全般の在り方を考える上でも貴重な示唆を持つものであること。

この授業実践は、「社会科の初志をつらぬく会西部地区研究集会」2006年1月28日・29日で発表された（なお、筆者は当時、この会の西部地区研究部長であり、子どもの興味・関心を重視する問題解決学習の実践の推進に取り組んでいた。また本集会の運営責任者であった。したがって、広義にとらえれば、この実践の研究は筆者にとってアクションリサーチであると位置づけることもできよう。ただ、直接的な助言や指導などをこの実践者に行ってはいない）。今回はその提案資料（単元構想、子どものカルテ、授業記録など）を対象として授業の分析を行った。以下、単元の目標、指導の計画、子どもへの教師の願い、については実践記録から一部を抜粋している。それ以降は筆者の分析に基づく記述である。

#### 〈単元の目標〉

- 身近な野外に出かけ、季節や生き物の変化や不思議さに興味や関心をもつことができ、生き物への親しみをもつことができる。（関心・意欲・態度）
- 学校やSキャンプ場で生きもの探しや話し合い活動を通して、生き物についての変化や成長の様子について気づくことができる。（気付き）
- 図鑑を使って生き物の生活のしかたについて調べたり、気付いたことを絵や文にして表現することができる。（思考・表現）

#### 〈指導の計画〉…21時間（うち図工2時間） 2005年5月24日～6月30日

- |     |                              |      |
|-----|------------------------------|------|
| 第1次 | 身近な自然の生き物について話し合う。           | …6時間 |
| 第2次 | Sキャンプ場に、自然たんけんに行く。           | …3時間 |
| 第3次 | 虫のえさについて話し合い、調べる。            | …3時間 |
|     | (1) バッタが好きな草について話し合い、予想を立てる。 |      |

(2) バッタがどんな草が好きなのかなど、ほかの虫のえさについて図鑑で調べ、わかったことや思ったことを「あのねちょう」に書く。

(3) 調べてわかったことや思ったことを発表する。…事例① (6月15日)

第4次 虫の命の守り方や生活の仕方について話し合い、調べる。…3時間

(1) バッタの命の守り方について話し合い、予想を立てる。

…事例② (6月16日)

(2) バッタの身の守り方などほかの虫の身の守り方について調べる。

(3) 調べてわかったことや思ったことを発表する。

第5次 1年生に「しぜんの生きものたんけん」クイズ大会をする。

…4時間

(図工2時間)

〈子ども (学級全体) への教師の願い〉

本単元の指導において、子どもが自然の生きもの探しや調べ活動などを通しての何気ない気付きや問いから学習問題を成立させるような問題解決学習を行っていく。そのことにより、自分の思いや考えを出し合う子どもを育てたい。(下線は筆者による。)

### 3 授業の分析

#### 授業事例①の分析

以下の、分節の設定および分析は筆者による。Tは教師、Cは不特定・多数の子どもの略号である。子ども個々の名前は仮名にしている。巻末に「発言表」を掲載しているので、参照されたい。なお、今回の「発言表」の原版はA4判であるが、紙面の都合で65%縮小している。授業事例②も同様。

・本時のねらい

バッタのえさについて調べてわかったことや思ったことを発表しあう。

1) 授業の分節

・第1分節 (日直1~C17)

教師がC (子ども全体) に問いかけながら、バッタについて今まで調べて

分かったことを確認し、本時の学習問題（バッタのえさについて調べて分かったことを発表しよう）を坂書して、子どもに読ませている。なお、バッタの入った飼育箱が教室の中央に置かれている。

・第2分節（T18～T43）

バッタはイネのようなやわらかい草が好き、バッタのえさはササの葉、小さな虫、オヒシバ、エノコログサ、キュウリ、キャベツ、リンゴ、といった発言が次々に出ている。

・第3分節（YU44～T74）

YUがバッタのえさの他に、バッタをえさにする生きものを発表し、子どもたちはバッタを食べる生きもの（カエル、トカゲ、カマキリ、ヘビ、クモ）を出している。

・第4分節（MT75～TK106）

バッタのえさとバッタを食べる生きものについて、多くの子どもが次々に発言している。教師は、バッタのえさについてまとめ、新しく出た問題（バッタをえさにする生きもの）を確認している。TTがバッタは食べられそうになった時、飛ぶという意見を出している。

・第5分節（T107～C124）

教師が用意していた絵（クモがバッタをぐるぐる巻きにしている）を紹介し、子どもたちはこの絵について質問している。

・第6分節（T125～YA171）

教師が、第4分節で出していたTTの意見を確認している。さらに、今までの子どもの発言に対して質問してもいいと述べ、子どもたちは、TTに対して翅のないバッタが飛んで落ちてトカゲがいたらどうするか、バッタは危ないときだけでなく、だれか探しに行く時も飛ぶのではないか、などと尋ねている。その後、ジャンプして逃げるというが、カマキリにつかまったらどうするかという質問—応答が長く続いている。

・第7分節（T172～YU199）

教師が前分節での質問—応答を終わらせて、バッタは危ないとき、他にどのような逃げ方をしているのかと尋ねている。子どもたちは飛ぶとクモの網

にかかる、ジャンプして飛ぶ、木にのぼっていくといった様々な考えを出している。クモの巣から逃げるができるか、について意見が交わされている。

#### ・第8分節（T200～T205）

教師は、危ないときに逃げるということはどんなことなのかと尋ね、自分のいのちを守るという発言が子どもから出ている。その後、危ないときにバッタは自分のいのちをどう守るのか、について自分の考えを書かせ、次時の授業ではバッタのいのちの守り方を考えることを学習問題にすると述べて、授業を終了している。

### 2) 授業の発言状況

教師と子どもの発言回数比は1対2.0で、クラスの子どもの総数37名（1名欠席）中18名が発言している（日直を除く）。分節の最初の発言は第3、第4分節を除いて教師である（第1分節では日直が授業開始の発言をしている）。子どもの中では、YUが26回と多くの発言をしている。その他、FMが22回、YAが13回、TMとTTが12回と特定の者の発言が多い。

第1分節では、教師が9回、C（不特定・多数の子ども）が5回発言して、これまでの活動や本時のめあてを確認している。C以外にはFMが2回発言しているが、これも教師と簡単なやり取りをしているものである。教師のT7は6単位、T13は5単位と長く、丁寧に説明をしている。一方、子どもたちの発言はいずれも1単位の短いものである。

第2分節では、教師のT1の後、10名の子どもの初回発言がある。教師との対応の中で複数回発言している子もいるが、比較的、発言の順番を守った形になっている。教師は、計7回発言があるが、T20の2単位以外はどれも1単位の短いもので、ここで発表の仕方について簡単に示しているものが多い。

第3分節では、YUが6回発言して自分の意見を丁寧に述べている。教師もT45・47・49でYUに対応している。途中からFMが5回、HKが3回発言して、YUに付け加えている。ここでの初回発言者はKA1名だけである。

第4分節では、最初、MT、TT、TK、FAら初回発言者が教師とやりとりを

しながら自分の意見を出している。後半は、FMが教師に対して7回発言している。教師は全体で12回と比較的多くの発言をして、子どもたちの発言内容を確認している。

第5分節では、教師が自ら用意した絵の説明をしているところで、1単位の発言を8回行って、子どもに簡単に対応している。TMは3回発言して、教師の発言によく応じている。ここでは初回発言者のNS、NKも各1回、1単位の発言をしている。この段階で計18名の子どもの発言がある。

第6分節では、教師がT125で、前の分節で出たTTの発言を取り上げ、内容を再確認している。TTが126で説明した後、TTに対する質問が子どもたちから次々出て、ND、YUらとTTとの間で質問—応答がなされている。後半では、TTに代わって（おたすけマンを申し出た）YAとYUの間で議論がなされている。この分節ではYA12回、YU10回、TT9回、ND7回と、子どもたちが多くの発言をしている。これに比べて教師の発言は5回と少ない。

第7分節では、教師が12回発言して、新たな問題について子どもに尋ね、その内容を確認している。それに対しYUが7回、TMが4回発言して答えている。その他、TK、HK、FMらが1単位の短い発言を各1回行っている。

第8分節は、まとめの箇所であり、教師が4回発言しているが、T200とT205は2単位、T204は3単位の比較的、長い発言である。子どもでは、NDのみ2回発言して、教師の確認の問いかけに、短く答えている。

このように、本授業は、教師が多くの発言をしてリードしている箇所（第1分節、第5分節、第7分節、第8分節）と、子どもたちに比較的任せている箇所（第2分節、第3分節、第4分節、第6分節）とにわかれていた。また、前半、特に第2分節、第4分節は列挙・羅列的な発言が多く出た。後半の第6分節では、子ども同士の質問—応答が積極的になされていた。ただ、全般的にみて、特定の子ども同士の間で質問—応答がなされていることが多く、学習問題について多くの子どもが参加して議論を深めるという状況ではなかった。また、教師と子どもとの間での一対一的な発言のやりとりも多かった。教師の発言は全般的に1単位の短いものが多かつ

たが、授業の開始時は長い発言をして学習問題について丁寧に確認をしていた。

### 3) 「主要な言葉」の展開状況

本授業は、主なテーマ（話題）が二つだったこともあり、「主要な言葉」が非常に多く出ている。今までの分析事例では、大体10個から20個ぐらいの選択でよかったが、本授業では27個も選ばざるを得なかった。また用いられる言葉が前半と後半で大きく異なっていた。なお、言葉と、その言葉を変換した記号との関係がわかるよう、以下の叙述において一回のみであるが、変換した記号をカッコの中に記入している。

第1分節は、本時のめあての確認の箇所、教師は生きもの(Ω)、食べる(Θ)、えさ(Ē)、かたい(Π)、葉(☛)、やわらか(ω)といった本時のテーマにかかわる言葉を多く用いて、バッタはかたい葉っぱとやわらかい葉っぱのどちらが好きか、バッタのえさについて調べたことを発表してもらおうと述べている。一方、子どもからはC17でえさが一度出ているだけである。

第2分節では、子どもたちからバッタがどのようなものを食べるかということに関して、えさ8回、草(Ψ)、葉6回、食べる5回、が出ている。しかし、中心テーマに関する言葉である、やわらかは2回、かたいは1回、出ているだけで、あまりこの点に関して意見が出なかったことが伺える。YA21はかたい、食べる、やわらか、イネ(☛)を用いて、バッタはやわらかいほうが好きだと述べている。これは、教師のT13の問いに正対して答えている。TM27は小さな虫も用いて、小さな虫(Ψ)を食べると発言している。教師もT28で草、小さな虫、食べるを用いて、葉っぱだけでなく虫も食べることを確認している。ND30はえさ、やわらか、葉、食べるを用いて、バッタはやわらかい葉を食べていたと述べているが、これも本時のテーマに対応した発言である。HT38は今まで出ている草などの他に、キュウリ、キャベツ、リンゴを用いて、これらも食べると述べている。さらに不思議(§)も用いて、バッタがこんなに草を食べるのが不思議だと発言している。

第3分節では、YU44が草、キュウリ(Θ)、キャベツ(Ⓣ)、リンゴ(Ⓜ)、



といったバッタが食べるものの他に、えさ、生きもの、カエル (カ)、トカゲ (Y)、カマキリ (K) を用いて、バッタを食べる生きものについても言及している。教師も T49 でえさ、カエル、カマキリ、食べる、を用いて、YU の発言を確認している。なお、YU44・48 は、生きものを用いているが、これは教師が T7・13 で用いていた、生きものに対応している。ちなみに、この授業で、生きものを用いている子どもは他にはいない。ここでは、第2分節で多く出ていた、バッタのえさである植物関係の言葉は、YU44 の草、キュウリ、キャベツ、りんごが各1回出ているだけである。他の子どもからは出ていない。YU50・54 は、バッタを食べる生きものとしてヘビ (ヘ) やクモ (K) も出している。ここでは、全体的に、子どもたちからトカゲ5回、カマキリ4回、ヘビ、クモ3回と、バッタを食べる生きものが多く出されている。

第4分節では、MT75 が草、食べる、リンゴ、キュウリと、第2分節の前半において主な話題になっていた、バッタが食べるものを再度、用いて発言している。TT76 も草、葉、食べると、バッタが食べるものを出しているが、T77 にもう一つ (あのねちょうに) 書いてなかったかと促され、TT78 でカマキリ、トカゲ、食べる、飛ぶ (ト) を出して、バッタが食べられそうになったら飛ぶ、カマキリは飛ぶのが上手くないし、トカゲは飛べないからだと理由を述べている。TM79 と HK80 はトカゲ、飛ぶを用いて、トカゲが飛ぶかどうか、について質問—応答をしている。このバッタが飛ぶという話題はここではその後、あまり広がらず、話題はバッタが食べるもの、バッタを食べるものにまた戻っている。TK82 は小さな虫、食べる、クモ、カマキリを出して、バッタが食べるものと、バッタを食べるものの双方について発言している。FA85・87 はえさ、草、食べるを用いて、バッタが食べるものについて出しているが、教師に大きな声で、と言われた後、FA89 でカマキリ、カエル、ヘビ、トカゲ、鳥 (ト)、食べるを用いて、バッタを食べる生きものについて発言している。また、不思議 (§) も用いて、バッタの後ろ足はなぜ長いのか、と疑問を出している。教師は T90 で食べるを用いて、バッタが食べられると思った、と FA の発言をとらえている。これに対して、FM は 91・93 で鳥を用いて、FA は鳥についても発言していたと、教師に伝えている。教師は T94 から T102 で鳥、草、葉、や

わか、イネ、リンゴ、キュウリ、食べる、虫を用いて、鳥もバッタを食べると付け加え、さらに今までの追究結果について、バッタが食べるものや、バッタがやわらかい草を好むことがわかったとまとめている。そして、T104でカエル、カマキリ、トカゲ、クモ、鳥、食べるを用いて、バッタも他の生きものから食べられると述べている。このように、第4分節は、バッタが食べるもの、バッタを食べる生きものの双方が出ているが、教師はバッタを食べる生きものを追究することにやや重点をおいている。

第5分節では、教師が用意した絵を見せ、それに対して子どもたちが感想を出している。教師からはクモと食べるが1回、子どもたちからクモが1回、食べるが2回出ている。

第6分節では、教師がT125で食べる、飛ぶを出して、TTに、さっき(TT78で)、どんな時に飛ぶと述べていたか尋ねている。TT126は危ない(⊕)を出して、危なくなったときと答えている。これに対して、ND134は翅(✓)、飛ぶ、トカゲを出して、翅のないバッタが飛んで降りて、トカゲがいたらどうするかと尋ねている。TT135は飛ぶを用いて、遠くに飛べばいいと答えている。YA145は危ないと飛ぶを出して、危ないときだけじゃなく、誰かを探しに行くときも飛ぶのではないかと発言している。教師はT149で飛ぶ、危ないを用いて、YAに危なくなったときはどうすると思う、と尋ねている。YA150はジャンプ(M)、逃げる(Я)を出して、ジャンプして逃げると発言している。その後、YU153がカマキリ、飛ぶを出して、カマキリに捕まったらバッタは飛べない、とTTに反論している。TT154はわからないと答え、それに代わってYAが(おたすけマンを申し出て)答えている。この後、YAはカマキリ4回、飛ぶ2回、逃げる1回を用いて自分の意見を主張している。YUもカマキリ2回、ジャンプ1回を用いて、質問している。YAはジャンプして逃げることができる、YUはできないという意見であるが、話は堂々巡りになっている。このように後半は、飛んで逃げてもバッタはカマキリやトカゲにつかまるのではないか、とといった点について検討されている。

第7分節では、教師がT172・174でクモ、逃げるを2回、飛ぶ、ジャンプ、カマキリ、カエルを1回用いて、バッタは、クモなどにばれないように飛んだ

りする以外にどんな逃げ方があるのか尋ねている。YU177・179はクモを2回、ジャンプを1回用いて、バッタはジャンプに失敗してクモの巣にかかったと発言している。教師はT180でジャンプと逃げるを用いて、ジャンプしても逃げられないことがあると、その発言に応じて述べている。HK182は逃げるを用いて、足にギザギザがあるので（クモに捕まっても）逃げることができると発言している。FM189は翅を用いてバッタに翅はあるのかと質問している。これに関連して、YU191はジャンプ、翅、クモを用いて、バッタはジャンプしたときに翅が開くが、クモの巣にひっかかるとFMに説明している。教師はT192で逃げる、ジャンプを用いて、再度、バッタの他の逃げ方について尋ねている。TM193はジャンプ、飛ぶを用いて、ジャンプして飛ぶと、逃げ方のプロセスを丁寧に述べている。YU197は、木を出して、木にのぼっていくと、今までと違う逃げ方を出している。教師もT198で木を用いて、木にのぼって…、とその先を尋ねている。YU199は木を用いて、木のとっぺんまでいくと答えている。このように逃げ方に関する言葉が出ているが、新しい逃げ方は木にのぼるというものぐらいで、あまり出なかった。教師はここで逃げる5回、ジャンプ3回、クモ、飛ぶ2回と多くの言葉を用いて、課題に関する子どもの発言を促そうとしている。

第8分節では、教師がT200で危ない、ジャンプ、逃げる、飛ぶを用いて、バッタが危ないときジャンプして逃げる、飛ぶのというのはどういうことなのか、自分の…と途中までいって、その先の答えを尋ねている。ND201がいのち(♥)を用いて、答えている。さらに、教師はT202でいのちを用いて、自分のいのちを、とさらにその先を尋ね、ND203は守る(全)を出して答えている。教師はT204でいのち、守る、危ないを用いて、バッタは危ないとき自分のいのちをどうやって守るのか、自分の考えをノート(あのね帳)に書くように指示している。さらに、T205でえさ、いのち、守るを用いて、今日の授業で、バッタはどうやっていのちを守るのかという問題にまで発展したと、評価している。

このように本授業では、最初(第2分節まで)、バッタのえさについて、

特に、かたい葉がすきかやわらかい葉が好きかについて追究がなされ、イネや草など、バッタのえさである植物などが多く出ていた。第2分節で、HT38は不思議を用いて、こんなに草を食べるところが不思議だと感想を述べていたが、これは重要な発言であった。第3分節では、YUがカエル、トカゲ、カマキリ、ヘビ、クモなどを用いて、バッタをえさとする生きものについて言及していた。他の子どもたちからもこれらの言葉が次第に出ていた。第4分節は、バッタが食べるもの、バッタを食べる生きものの両方に関する言葉が用いられていた。また、TT78は飛ぶを出して、食べられそうになったら飛ぶと、(後ほど話題になる)バッタの逃げ方について言及していた。FA89は不思議を用いて、バッタの後ろ足はなぜ長いと疑問を出しているが、これも貴重な問題の提起であった。その後、教師はバッタが食べるものに関してまとめていた。第6分節では危険な時のバッタの逃げ方が話題になり、飛ぶ、カマキリ、逃げる、危ない、ジャンプ等が出て、バッタは飛んだり、ジャンプしてカマキリから逃げるができるか、という点が検討されていた。第7分節では、バッタは逃げる以外に、他の方法があるのか、と教師が尋ねて、クモ、飛ぶ、ジャンプの他、翅や木などが用いられて、検討されていた。ただ、木にのぼるといった以外は新しい考えは出ていなかった。第8分節は、いのち、守るといった、バッタが危ないときに逃げる行為を意味づける言葉が、教師とのやり取りの中でNDから出ていた。そして、これをもとにして、次時の学習問題(バッタはどうやっていのちを守っているのだろう)が示されていた。

## 授業事例②の分析

### ・本時のねらい

「バッタはどうやっていのちをまもっているのだろう」ということを話し合う。

### 1) 授業の分節

#### ・第1分節(日直1~C12)

教師が子どもたちに対して前回の授業内容を確認し、本時の学習問題

(バッタは自分のいのちをどうやって守っているのだろう)を坂書して、子どもに読ませている。

・第2分節 (T13～T51)

教師が子どもたちに自分の考えを出すよう促し、バッタはいのちを守るために飛んで逃げる、ジャンプして逃げる、草むらに隠れる、といった発言が出ている。これらの発言に対する質問も出ている。

・第3分節 (SG52～SG61)

SGがジャンプして草むらに隠れれば(バッタと草の)色が同じなのでよい、と発言したのに対してNDが、茶色いバッタだったらばれると反論し、両者の間で質問—応答が起きている。

・第4分節 (TM62～T84)

バッタは飛んで逃げる、翅のないバッタは跳ねて逃げるという発言が出ている。跳ねて逃げるという意見に対して、跳ねて逃げてもクモやトカゲにつかまって食べられるという反論も出ている。

・第5分節 (TK85～NY112)

バッタは木に隠れる、岩に隠れてその後で草むらに行く、といったように、隠れるという意見が多く出ている。隠れても後ろからカマキリが来たらどうするといった質問が出ている。

・第6分節 (HT113～TM145)

教師が、(ノートにバッタが歩いて逃げると書いていた)HTに対してバッタはどんな風に歩くのかと尋ね、HTは忍者みたいに静かに歩くと発言している。これに対してどうやって忍者みたいに音を出さずに歩くのか、といった質問が出ている。さらに、バッタは歩くのか、クモが下を見てたら見つかるのではないかといった質問や意見が出ている。

・第7分節 (FM146～FM158)

FMがバッタは飛んだりジャンプして逃げる、と発言している。FMがシヨウリョウバッタに言及したこともあって、シヨウリョウバッタに翅があるかについて意見が出ている。

・第8分節 (YA159～YA186)

YAがバッタは小さかったら草むらに隠れると発言する。それに対して、YUが隠れてもクモに見つかったらどうすると質問し、両者の間で質問—応答が長く続いている。

・第9分節 (T187~T221)

教師が第8分節でのYAとYUの発言に関連しているとして、クモがバッタを巻き付けている絵(6月15日の授業でも提示したもの)を見せている。さらに、話題を転換して、TUに発言を促している。TUはバッタが自分の色に似たところに隠れると発言する。その後、FKが飛んで逃げると発言している。それに対してクモやカマキリがバッタの前にいたらどうするのか、といった質問が出る。その質問に対してそんなにクモの巣はあるのかといった反論も出ている。

・第10分節 (SG222~ND242)

考えが変わったという子どもの発言が出て、SGは飛んで逃げる、FMやNDは草むらに隠れる、と述べている。

・第11分節 (HR243~FM286)

今まで発言のなかった子どもから、危ない時バッタは巣に隠れる、飛んで逃げて草のかげに隠れる、といった発言が出ている。ジャンプして草むらに隠れるという発言も出るが、FMはクモの巣があったらどうすると反論している。

・第12分節 (T287~T292)

教師がバッタはいのちを守るために隠れる、飛んで・跳ねて逃げるという二つの考えが出た、また、翅があるバッタは飛んで逃げて、翅のないバッタは跳ねて逃げるという意見が出た、と本時のまとめをしている。さらに次の時間、どうやって自分のいのちを守っているのか図鑑で調べようと述べ、今の自分の考えを「あのねちょう」に書くように指示して、授業を終了している。

## 2) 授業の発言状況

教師と子どもの発言回数比は1対3.3で、クラスの子どもの総数37名(1

名欠席)中27名が発言している(日直を除く)。分節の最初の発言は、日直による第1分節を除いても、第3～第8分節、第10～第11分節において、子どもたちであり、今回、授業の方向づけをかなり子どもたちが行っていたといえる。子どもの中では、YUが34回、FMが27回と多くの発言がある。その他、TMが22回、YAが15回と比較的、特定の者の発言が多い。

第1分節では、教師が6回発言して、昨日の授業内容や本時の学習問題を確認している。教師によるT5発言は4単位と長いものである。子どもたちも(日直を含めて)6回発言しているが、全て1単位の短いもので、簡単に教師に対応している。ここでの初回発言者は2名である。

第2分節では、T13の1単位の発言の後、子どもたちが次々に考えを述べている。YUは第1分節でも2回発言しているが、ここでも8回発言して、NM、HS、NKらに質問しており、これらの子どもとYUとの間で質問—応答がおきている。最後の方で、先生とYUとのやりとりがある。初回発言者は6名である。

第3分節では、初回発言者であるSGが4回、NDが3回発言して、両者の間で質問—応答が起きている。教師はT60で1回発言して、SGの発言を評価している。

第4分節では、TM62の発言の後、初回発言者であるKG、NH、TKらが発言している。NHにTKが質問している。その後、NHに(おたすけマンとして)代わったTMとTKとの間で質問—応答がなされている。

第5分節では、教師が9回発言して、TK、YS、SKらの発言内容を確認している。T101は3単位の比較的長い発言で、SK100の発言内容を確認し、さらにNYの意見を求めている。その後、NYとFMの間で質問—応答がみられる。ここでは5名の初回発言者がいる。

第6分節では、初回発言者であるHTがHS、HK、YUや教師に対応しながら、13回発言して、自分の意見を丁寧に述べている。なお、HTはこの分節以外、発言はない。教師はT126でHKの質問に対応し、T128・130・132でHTの考えを確認している。

第7分節では、FMが5回発言して、新しい観点を出している。YU、NK、TM

が関連した発言をしている。

第8分節では、YA159の発言に対してYUが質問し、二人の応酬が続いている。YAは14回、YUは13回発言している。その他にはFM174の発言が1回あるだけで、教師の発言もない。

第9分節では、前半、教師の発言が多くT187～T205まで7回の発言がある。T191は3単位の長いものである。後半、TKがFKに質問するが、FKに代わってTMが答え、TKとTMのやりとりがある。教師はT216からT221まで3回発言し、TMの意見を支持している。2名の初回発言者がいる。

第10分節では、SG、FM、NDらが、複数回発言して自分の考えを出している。教師も7回発言して、手短に対応している。ここでは初回発言者はいない。

第11分節では、HR、KW、MT、KAの4名の初回発言者が出ている。教師はKWには5回対応して丁寧にその内容を確認している。後半は、MTにFMが質問し、MTに代わって（おたすけマンを申し出た）KAが質問に答えている。FMは8回発言している。

第12分節では、教師が3回発言しているが、T287は4単位の長い発言で、本時の活動をまとめている。T290・292も2単位の長い発言で、次時の学習問題を確認し、本時の最後の活動を指示している。その他には、YUとCとの間で短いやりとりがある。

このように、本授業は子どもたちになりに発言を任せている箇所（第3分節、第4分節、第6分節、第7分節、第8分節）がみられた。前半（第1分節から第6分節）は、やや列挙・羅列的な発言状況になっていたが、YU、FMは他の子どもに質問を出していた。第7分節から子どもたち同士の対応が積極的ななされ、第8分節は2名の子どもの中で長く質問—応答が続いていた。第9分節でも質問—応答がみられた。また、第11分節といった、授業の終盤においても、初回発言があるなど、発言者が最後まで増えていた。ただ、質問—応答は少数の（2名ぐらいの）間でなされていることが多く、多くの子どもが参加する議論にまでは至ってなかった。教師の発言は全般的に1単位の短いものが多かったが、授業の開始時やま



とめの段階では、比較的、長い発言がみられた。

### 3) 「主要な言葉」の展開状況

本授業は、授業で追究する問題が絞られていたこともあり、「主要な言葉」は前回の授業ほど多くはなかった。ただしバッタが隠れることに関する言葉（隠れる場所、隠れ方など）は新たに出ていた。

第1分節は、本時の目標の確認の箇所であるが、教師はT3でトカゲ（Y）、クモ（X）、など、バッタを食べる生きものを出している。そして、どうやって食べられないように…、と述べているが、これに対してYU4がいのち（●）、守る（全）を出して、教師による学習問題の確認に対応している。

第2分節では、まずYN14が飛ぶ（➡）、逃げる（Я）を出して、バッタは飛んで逃げると発言している。NM17はジャンプ（M）、逃げる、カマキリ（K）を出して、カマキリなどバッタを食べる生きものが地面にいますのでジャンプして逃げればよいと述べている。YU23はジャンプ、カマキリを用いて、ジャンプしてもカマキリが追いかけてきたらどうするとNMに質問している。その後、HS29は色（◇）、草むら（III）、隠れる（Σ）を出して、自分と同じ色の草むらに隠れると、新しい考えを出している。これに対しても、YU32は隠れると見つかる（Φ）を出して、隠れても見つかったらどうすると質問している。NK37は見つかる、逃げるを用いて、見つかっても早く逃げればよい、と反論している。教師はT44でジャンプ、飛ぶ、逃げる、を出してYUに自分は一体どんな意見なのかと問い直している。この分節では、全体的にみて、子どもたちから、逃げる、ジャンプが6回出ている。これらはバッタがどのようにいのちを守るかに関する言葉で、前日の授業の終盤でもよく出ていた。その他、カマキリも3回出ていたが、これは何からいのちを守るのか（逃げるのか）という対象を示す言葉である。隠れる、見つかるも2回出ていて、敵に発見されないことも、後半、話題になっている。

第3分節では、SG52がジャンプ、草むら、隠れる、色、草と多くの言葉を用いて、バッタはジャンプして草むらに隠れれば、草と色が同じでわからない、と丁寧に説明している。これに対してND55はカマキリ、色、草むら、隠れ

るを用いて、茶色いバッタは草むらに隠れてもカマキリにばれると反論している。これに対してSG58は色、草、隠れるを用いて、枯れている草に隠れればいいと述べている。このように、ここでバッタと草の色の関係に着目した意見が出ている。教師の発言は1回だけで、主要な言葉は用いていない。

第4分節では、まずTM62が飛ぶ、逃げる、草むら、隠れる、カマキリを用いて、飛んで、草むらへ逃げると発言している。YU63は飛ぶを用いて、どこに飛んだと尋ねているが、TMは答えていない。その後、子どもたちから飛んで、あるいは、ジャンプして逃げるという発言が多く出る。KG66は飛ぶ、逃げるの他にいのち、守る、という第1分節で出ていた言葉を用いている。NH67もいのち、守る、翅、ジャンプ、逃げる、飛ぶと多くの言葉を用いて、翅のないバッタはジャンプして(跳ねて)逃げる、翅のあるバッタは飛んで逃げる、と発言している。教師はT68でそのわけを尋ねている。NY71はジャンプ、逃げる、飛ぶを用いて、跳ねて逃げたら速くなる、飛んで逃げたら高くなる、と逃げ方の意味の違いについて説明している。これに対してTK74はジャンプ、逃げる、クモを出して、跳ねて逃げても先にクモが糸を引いていたらどうするかと質問している。NHに(おたすけマンを申し出て)代わったTM77は逃げるを用いて、他のところに逃げればよいと主張している。それでも、TK78は逃げる、ジャンプ、トカゲを出して、跳ねた先にトカゲがいたらどうすると反論している。この分節は、全体的にみると、子どもたちの方から、逃げるが7回、飛ぶが5回、ジャンプが4回出ていた。その他には、トカゲが3回、いのち、守るが2回出ている。この点で、第2分節に近い内容が出ているが、翅も1回出て、翅のあるバッタとないバッタという新たな観点も出ている。また、第1分節の学習問題の確認の際に出ていた、いのち、守るも用いられている。教師の発言は4回あるが、主要な言葉は用いられていない。

第5分節では、TK85・87・89がクモ、草、木(▲)、隠れるを用いて、バッタは木に隠れるという新しい考えを出している。教師もT86・88・90でクモ、草、木、逃げるを用いて、この発言を確認している。YS94はいのち、守る、木、色、トカゲを用いて、バッタも木の葉っぱと同じ色だからバッタをねらう虫がわからなくなると、TKの考えを支持している。SK100はトカゲ、飛ぶ、いの

ちを用いて、飛ばないといのちがなくなると発言している。教師はT101で飛ぶ、逃げる、木、隠れる、色を用いて、今までの子どもたちの発言を確認し、さらにNYの発言を促している。NY102は岩(■)、隠れる、草むら、いのち、守るを用いて、まず岩に隠れて、そのあと草むらに行く、と新しい観点を出している。これに対してFM106は岩、隠れる、カマキリを用いて、岩に隠れてもカマキリが来たらどうすると質問している。NY109は岩、隠れるを用いて、他の岩に隠れると答えている。ここでは全体的に、子どもたちから、隠れる6回、いのち、トカゲ、岩3回、木2回などが出ており、隠れるということが話題の中心になったことがわかる。一方、教師は逃げる4回、飛ぶ3回といったように、子どもたちとはやや違う言葉を多く用いている。

第6分節では、教師がT114で歩く(JI)、見つかるを用いて、(ノートに関連することを書いていた)HTにバッタは見つからないよう、どのように歩くのか尋ねている。HT115は忍者(M)、歩くを用いて、音を立てないで忍者みたい歩くと述べている、HS118は忍者、歩くを用いて、どうやって忍者みたいに音をたてないのかHTに尋ねている。また、HK123も歩くを用いて、バッタは歩けるのかと発言している。教師はT126で歩く、逃げるを用いて、飼育箱のバッタの様子を示して、歩けることを説明している。さらに、教師はT128で歩く、忍者を用いて、忍者みたいに歩くとはどのようなことかHTに尋ねている。HT131はクモ、木、歩く、草むらを用いて、歩き方を説明している。その後、YUがHTに対して5回発言し、クモ、隠れる、草むら、見つかるを用いて、クモが下を見てたら見つかるのではないかと質問している。HTは137、139で見つかる、草むら、隠れるを用いて、見つかると思ったら草むらに隠れると述べている。本分節では、全体的に、子どもから歩く7回、草むら5回、クモ3回、忍者、隠れる、見つかる2回、と今までと異なる言葉が多く出ている。教師も歩く3回、見つかる2回、逃げる、忍者、隠れる1回を用いて、対応している。このように、この分節では、バッタが歩いてどのように隠れるのか、丁寧な確認がなされている。

第7分節では、FM146がいのち、守る、飛ぶ、ジャンプ、逃げる、シヨウリョウバッタ(A)、翅と多くの言葉を用いて、翅のあるバッタは飛んで逃げ

る、翅のないバッタ（ショウリヨウバッタとか）はジャンプして逃げると発言している。これは第4分節でのNHの発言を、バッタの種類をあげてより詳しく述べたものである。その後、ショウリヨウバッタに翅があるかどうか、が検討される。YU151やNK153はショウリヨウバッタ、翅を用いて、ショウリヨウバッタに翅があると発言している。TM154はないと発言している。FM155は翅を用いて、見たことがないから分からないと発言している。このようにバッタの形態（種類）による逃げ方の違いが話題になっている。教師はT150で翅、飛ぶ、ジャンプを1回用いているが、ショウリヨウバッタは用いていない。全体的にこの分節では、子どもたちからショウリヨウバッタ、翅が4回出ている。

第8分節では、YAとYUとの間で質問—応答がある。YAは14回の発言で草むら、隠れるを3回、見つかる、逃げる、クモを2回、草、カマキリを1回用いて、小さいバッタは草むらに隠れることができると主張している。YUは13回の発言で、クモを3回、見つかる、逃げるを2回用いて、草むらに隠れてもクモに見つかるかと反論している。

第9分節では、教師が昨日の授業で見せた絵（クモがバッタを糸でぐるぐる巻きにしているもの）を再度提示し、T187・189でクモ、飛ぶ、逃げる、草むら、木、岩、隠れるを用いて、今、飛んで逃げると草むらや木、岩に隠れるといった二つの考え方が出ている、それは（今、YAとYUが議論している）クモに巻きつかれたらどうするといった話とはあまり関係がないと述べて、YAとYUのやりとりを一旦、終わらせて、TUの意見を求めている。TU190はいのち、守る、色、隠れる、岩、トカゲ、見つかる、と多くの言葉を用いて、バッタは自分の色に合わせて葉っぱや岩に隠れるという意見を出している。FK197はカマキリ、飛ぶ、逃げるを用いて、カマキリから飛んで早く逃げると発言している。これに対してTK206は飛ぶ、逃げる、クモ、カマキリを用いて、飛んで逃げても前にクモやカマキリがいたら食べられると反論している。TMがFKに代わって答え、3回の発言の中で、クモ、逃げるを2回用いて、前の方にクモがいたら違うところに逃げればいい、そんなにクモの巣があるのか、と反論している。TK218はクモを用いて、違うクモがいたらひっかかる、と発言する。教師はT219でたまたま（T）を用いて、それはたまたまだと指摘し

ている。FM220もこのたまたまを用いて、教師に同調している。この分節で子どもたちから多く出ていたのは、逃げる6回、クモ5回で、バツタが飛んでもクモの巣が前にあったら逃げることができるのか、という点が話題となっていた。また、最後の方で、今までのような堂々巡りの質問—応答ではなく、そんなにクモの巣があちこちあるのかという、具体的な事実を踏まえた発言があった。

第10分節では、SG225が飛ぶ、逃げる、カマキリ、トカゲを用いて、考えが変わって、バツタは飛んで逃げると発言している。FM228も考えが変わったと述べ、色、草むら、隠れる、岩、見つかるを用いて、同じ色だから草むらに隠れると発言している。ND239はカマキリ、トカゲ、隠れる、色、草むらを出して、ばれないように草むらに隠れる、トカゲもどこにいるかわからないからと発言している。このように子どもたちは多くの言葉を用いて、自分の考えを丁寧に説明している。教師はT240で草むら、隠れるを用いて、NDの意見を草むらに隠れると確認している。

第11分節では、HR243がバツタの巣(◎)、隠れるを用いて、バツタは危ないとき巣に隠れる、人間も危ないとき家に帰るから、という考えを出している。教師もT244でバツタの巣を用いてHRに対応している。KWは5回発言して、飛ぶを3回、逃げるを2回、草、隠れるを1回用いて、飛んで逃げて草に隠れる、と発言している。教師はT254で隠れるを用いて、この発言を隠れるという意見なのかと確認している。YU257は隠れる、草むら、色、草を用いて、草むらに隠れると発言している。教師はT258で隠れるを用いて、話を聞くうちに隠れるに意見が変わったのかとYUに確認している。その後、MT262がいのち、守る、ジャンプ、草むら、逃げる、カマキリ、と多くの言葉を用いて、ジャンプして草むらに逃げると発言している。これに対して、FM265はジャンプ、クモを用いて、ジャンプしてもクモの巣があったらどうすると質問している。MTに(おたすけマンを申し出て)代わったTK273は草、隠れるを用いて、草のところに隠れると発言する。KA276・278もクモ、逃げるを用いて、目の前にあるクモの巣はそれ以外のところに逃げられるとFMに反論している。しかし、FM283は飛ぶ、クモを用いて、飛ぶとクモの巣にかか

る、と再度、主張している。この分節では、全体的に子どもたちから、飛ぶが6回、逃げるが5回、隠れる、草むら、ジャンプ、クモが4回といったように、飛ぶ・ジャンプして逃げると、隠れて逃げるの双方の意見が出ている。また、飛んで逃げて草に隠れるといった、双方を取り入れた発言も出ている。

第12分節では、教師がT287で草むら、木、草、岩、隠れる、飛ぶ、逃げる、ジャンプ、翅、ショウリヨウバッタ、と今まで子どもから出てきた言葉を多く用いて、バッタはいのちを守るために、隠れると、飛んで・ジャンプして逃げるという二つの意見が出た、また、翅があるバッタは飛んで逃げて、(シュリヨウバッタとか)翅がないバッタはジャンプして逃げる、という考えが出たと確認している。それに対して、YU288はショウリヨウバッタ、翅を出して、ショウリヨウバッタには翅があると主張している。教師はT290で翅、逃げる、いのち、守るを用いて、翅のあるバッタとないバッタがあるかもしれない、バッタがどうやって逃げるのか(いのちを守るのか)、次回、図鑑を使って調べると述べている。

本授業では、まず第1分節で、教師と子どもの双方から、いのち、守るが出されて、バッタがどうやっていのちを守っているか考える、という本時の学習問題が確認されていた。その後、この学習問題(バッタのいのちの守り方)について、飛んで・ジャンプして逃げると、隠れるの二つの方法が出て、その点に関連する言葉が多く出ていた。飛んで・ジャンプして逃げる側は、第2分節、第4分節、第7分節などで多くの発言があり、ジャンプして草むらに隠れる、翅があるバッタとないバッタがあり、翅があるものは飛んで逃げ、ないものは跳ねて逃げる、バッタは飛んで高く逃げる、跳ねて早く逃げる、といった意見が出されていた。隠れる側は、第3分節、第5分節、第6分節で発言が多く出て、草むらや色が用いられて、バッタと草の色との関係が検討されていた。また、あまり全体に広がらなかったが、木や岩、巣に隠れるなど、隠れる場所について多様な考えが出ていた。HTは、第6分節で忍者、歩くを用いて、忍者みたいにバッタは静かに歩く」と述べているが、このように、自らの考えをイメージ豊かに示す発言も

見られた。第11分節は飛んで・ジャンプして逃げる、隠れるという双方の意見が出て、多くの言葉を用いて自分の考えが述べられていた。第12分節では、教師がT287で草むら、木、岩、隠れる、飛ぶ、逃げる、ジャンプ、翅、ショウリヨウバッタと、今まで出ていた多くの言葉を用いて、本時は二通りの考えがあったとまとめていた。また、T290で翅、逃げるの他、いのち、守るを用いて、次回、図鑑でバッタがどのようにいのちを守っているかを確かめる、と次時の学習について説明していた。

このように、本授業はバッタの形態といのちの守り方(逃げ方)の関連的な追究が活発になされていたといえよう。ただ、バッタが飛んだ先にトカゲやクモの巣があったらつかまるのではないかと、(仮定の場面を想定した)質問—応答が繰り返されている箇所が多く見られた。このような中、第9分節で、同じところにそんなにクモの巣があるのか、と、実態に基づいて反論しているTMの発言は、貴重であった。教師もT219で、逃げた先にクモがいてもそれは「たまたま」である、とこのTMの意見を支持していた。

#### 4 授業の言語的トポス…各授業での「主要な言葉」の位置図

ここで、今回、授業の言語的トポスとして作成した「各授業での『主要な言葉』の位置図」について言及しておきたい。これは、各授業の「発言表」を作成した後、それぞれの「発言表」に記載された「主要な言葉」を取り上げ、授業展開・構成の中でのその位置を示すように整理したものである。図を作成してみると、事例①では、バッタがどのようなものを食べるか、といった話題(第1段階)、次に、そのことが反転して、バッタが他のどのような生きものに食べられるのか、といった話題(第2段階)、さらに、危ないときにバッタはどのように逃げているのか、といった話題(第3段階)へと、時系列で、段階的に進展していることがわかった。そして、第3段階の学習内容をもとに、こういった逃げるという活動を、バッタによる、「いのちを守る」活動ととらえて、次時の学習課題に構成していた。第1段階と第2段階は、生きもの(A)→食べる→えさ(B)という構造は同じで、(A)(B)に入るものがスライドする、

という、食物連鎖的な内容を含んでいたと言えよう。また、パトスの観点からみると、この転換は、子どもたちが今まで親しんで来たバッタ、教室で飼っているバッタが他の生きものに食べられるという大変な事態（バッタの「受難」）であり、かなり強いインパクト・問題意識を子どもたちに与えたと思われる。それから、「不思議に思うこと」として子どもたちが出していた、「バッタはこんなに草を食べる」や、「バッタの後ろ足はなぜ長いのか」、といった感想や疑問があったが、これらも、ロゴス（理性）とパトス（感性）を帯びた言葉である。例えば、FAの発言「バッタの後ろ足はなぜ長いのか」は、バッタがジャンプして逃げるという、後の方で出たバッタの逃げ方に結びつくもので、生きものの形態とその生き方を関連的に考察する契機になり得るものである。さらに、まとめの箇所で、教師との対応の中で（教師の誘導的な発問はあるが）NDから出た「いのちを守る」という発言も、単にバッタの逃げ方を科学的・論理的に追究するだけでなく、本気になってバッタのいのちの守りかたについて考えようとする気持ち（パトス）を高める契機となるものであったといえよう。

事例②では、学習問題（バッタのいのちの守り方）について、飛んで・ジャンプして逃げると、隠れる、の二つの方法が大きく出て、検討されていた。そして、バッタの形態（翅の有無、体の色の違い）と逃げ方の違い（飛んで逃げる・ジャンプして逃げる）・隠れる場所の違い（草むら、枯れた草、岩、木）の関連性が明らかになっていった。ただ、授業全体を通じてこれらの点が主な話題になっており、事例①のような学習内容の段階的な進展は、それほど顕著に見られなかった。なお、隠れ方についてもいくつかの考えが出ていたが、その中で、忍者みたいに静かに歩くというイメージ豊かな発言もあった。さらに、バッタは危ないときに巣に隠れるという意見もあったが、これは自分たちの生活（危なくなったら家に帰る）を考えて、イメージをふくらませたものであり、その点でパトス性を帯びた言葉であるといえよう。YUは、バッタの翅の有無に強くこだわっていたが（第7分節、第11分節 ショウリョウバッタに翅はあるという主張）、これは日頃の観察に基づいた発言と思われる（筆者注…実際、ショウリョウバッタに翅はある）。

さらに、事例①と事例②の「位置図」をつなげて見てみると、（バッタの）「い



のちを守る」ための行為という点において、双方の主要な学習内容が統一できることが分かった。つまり、バッタは「いのちを守るために」自分を食べる生きものから逃げるだけでなく、「いのちを守るために」多くの草や小さな虫を食べているのである。また、事例①ではバッタが多くの草を食べることが出て、事例②ではバッタが草むらや草のかげに隠れるということが出ていたが、これは、バッタが特に草（植物）に強く依拠して（食糧・隠れる場所など）生きている実態が追究されたことを示している。なお、事例①で、バッタを食べる生きものとして出ていたヘビ、カエル、鳥などは、事例②においてはあまり出ずトカゲ、カマキリ、クモがよく出ていた。そして、後半は、特にクモが多く用いられ、逃げてクモにつかまるのではないかと、といった点について何度も質問—応答がなされていた。これは、事例①で教師が子どもたちに見せた、クモがバッタをとらえている絵のインパクトが大きかったことを示していると思われる。

このような、授業中の発言という具体的な事実によって作成された言語的トポス（学習内容群、学習内容の位置関係の図）は、類似性のある教育実践の計画や指導を考える際、基本的な学習内容の構成に関して重要な示唆を与え得ると思われる<sup>6)</sup>。

## 5 まとめ

ここでは、様相—解釈的な研究によって明らかになった本実践の意義や課題についてまず述べておきたい。本実践では、子どもの発見や問題意識をもとに、バッタは「いのちを守る」ためにどのように行動しているのか、という点について非常に活発な追究活動がなされていた。子どもたちは自分の気づいたことを丁寧に表現し、また子ども同士で質問—応答をして確かめていた。ただ、コミュニケーション上の課題として、質問—応答がともすれば、閉ざされた少数者間での、（解決につながる根拠に乏しい）堂々巡りのやりとりになっている箇所もみられた（特に事例②）。この点に関しては、大きな一つのテーマを巡って自分の意見を出し合う、といったように、開かれた議論を促進する必要があるだろう。また、教師は、子どもの発見や気づきに丁寧に対応していたが、事例①

で出た「不思議に思うこと」という子どもの発言（これは科学的な問題発見という意味でロゴスのであり、何かどうも気になる心情という意味ではパトスのでもある）は、その授業において十分、位置づけられてはいなかった。しかし、実践者である教師自身、この実践での子どもたちに対する願いとして、「…子どもが自然の生きもの探しや調べ活動などを通しての何気ない気付きや問いから学習問題を成立させるように問題解決学習を行っていく」と記しているのである。このクラスでは、このような何気ない問い（そして、発展可能性を持つ問い）がもう既に子どもから出される状態になっているので、今後はそのような問いにも丁寧に対応すること、さらに、子どもの問いに関して子どもたち自身が具体的事実・根拠をもとに確認・追究していくように促すことが、授業展開（学習内容の展開）上の課題であると思われる。ただし、これは本実践のみならず、これからアクティブ・ラーニングといった名称で子どもの学習活動が活発に促進されるであろう、今後の日本の教育活動<sup>9)</sup>においても共通に留意されるべき要点だと思われる。つまり、活動のための活動ではなく、子どもの問いを生み出し、その問いを共有し、全体で解決しようとする活動が重要なのである。

次に研究上の課題について述べたい。まず、上記のように、事例とした授業の実態や課題について、具体的な根拠を持って示すことができた点で、自然を主な対象とする生活科の「話し合い」の授業に対する、様相—解釈的な研究方法の適用可能性が明らかにされたといえよう。ただ、今回、「発言表」の他にも授業の言語的トポスを表現する試みを行ったが、どのような形に構成すれば、授業における（ロゴスとパトスの）言語状況をより明確に示すことができるのか、まだ検討すべき余地がある。言語的トポスの望ましい表現のあり方については、今後も考えていきたい。

#### [注]

- 1) 拙稿「『発言表』を使用する授業分析 — ワープロ処理による授業の内容的構造の追究 —」教育方法学研究第14巻 1989年、から、最近のものとしては拙稿「質的な授業分析の意義・課題・可能性 — 授業実践の様相 — 解釈的研究 —」西南学

- 院大学人間科学論集第9巻第2号 2014年、などがある。
- 2) 拙稿①「授業における発言の様相—解釈 — 小学校1年生の授業を事例に一」西南学院大学児童教育学論集 2001年、②「授業実践の様相—解釈的研究 — 『発言表』を使用する授業分析 —」西南学院大学人間科学論集第3巻第2号 2008年、③「授業実践の様相—解釈的研究 — 小学校の生活科・社会科を事例に一」西南学院大学人間科学論集 第4巻第1号 2008年、④「カリキュラムの展開過程の研究 — 『発言表』を用いた生活科授業分析 —」西南学院大学人間科学論集第6巻第2号 2011年、など。
  - 3) 「発言表」の創始者である中村亨は、授業分析における記録資料では、その作成操作を可逆的に辿って、現象にまで到達し得る明瞭さを持つことが望ましいと、発言表でのアナログ的表現の意味を述べている。中村亨「発言表を使用する授業分析 — 授業における子どもの相互関係にふれて —」教育方法学研究第12巻 1987年 111-112頁。
  - 4) ログス、パトス、トポスについては、中村雄二郎『パトスの知 — 共通感覚的人間像の展開』筑摩書房 1982年、『感性の覚醒』岩波書店 1975年、『トポス 場所』弘文堂 1989年、等を参考にした。言語的トポスという言葉は『トポス 場所』において用いられている(同書 6頁)。また、中村は、『感性の覚醒』において、ルソーの言語論をもとに、コミュニケーションを概念的コミュニケーションとイメージ的コミュニケーションとにわけて、以下のように述べている。「ところで、理性の普遍性において人間と人間とを結びつけるものが概念的コミュニケーションであるのに対して、感情の共同性において人間と人間とを結びつけるものはなにかといえ、それはなによりもイメージ的コミュニケーションであろう。そして、この二つのコミュニケーションの働きをともに含んでいるのが言語、自然言語である。(同書 94頁)」また、ルソーの言語論に言及しつつ、情念(パトス)の言葉について以下のようにその意義を述べている。「情念の言葉がルソーによってすぐれて人間的な言葉だとされたのは、それが人々の心と心とを存在の深部で結びつけ、他人との共感や同化を可能にするような言語だからである。…略…したがって、ここで情念の言葉というのは、ただ感情に駆られたり、また訴えたりする言葉でなくして、人間として十全なコミュニケーションを成り立たせるような言葉である。観念や論理だけではなく、感情やイメージをも伝え合うことのできるような言葉なのである。(同書 187-188頁)」このようにパトスの言葉をとらえた場合、教師と子ども、さらに子ども同士のコミュニケーションを重要な基盤とし、概念や論理、さらに感情やイメージを相互に深く伝え合うことが求められる授業実践(特に問題解決学習など)について研究する際、なぜログス(概念)の言葉だけでなく、パトス(情念)の言葉も併せて考察する必要があるのか、よく理解できるであろう。ただし、授業に先立って予めログスの言葉、パトスの言葉というものがあるのではなく、状況や文脈、使用者の意識などに依拠して、その傾向性が判断されるべきである。また、ログスとパトスの双方の傾向性を同時に帯びた言葉も考えられる。

- 5) 日本社会科教育学会 第62回全国研究大会(2012年9月30日)における「課題研究Ⅰ 社会科授業の研究と経験を科学する」での発表。テーマは「定性的な授業分析の意義・課題・可能性 — 社会科教育研究において —」であった。
- 6) 中村雄二郎は、言語的トポスに関して、以下のように述べている。「…すなわちギリシャ語では言語についてトポスとは、とりわけ、人間の知的・言語的な遺産としての、或る主題についてのさまざまな考え方、言い表し方の集積所(貯蔵庫)を意味している。」(『トポス 場所』弘文堂 1989年 7頁)、このような考え方に示唆を受けて、筆者なりに考えて授業研究に援用すれば、「授業における言語的トポス」とは、ある主題の授業実践における発言・表現の集積所(貯蔵庫)なのであり、教育の世界での知的遺産として、類似性を持つ教育実践に対して活用可能性を持つものである、と行うことができよう。
- 7) 文部科学省は、平成26年11月20日、中央教育審議会に対して、「初等中等教育における教育の基準等の在り方について」諮問をしたが、その中には今後の「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方や評価の仕方が含まれている。

西南学院大学人間科学部児童教育学科



## 授業の言語的トポス (各授業での「主要な言葉」の位置図)

## 事例① 6月15日の授業

〈第1段階〉  
 Ω (生きもの) = バッタ  
 ↓  
 Ω (食べる)  
 ↓  
 E (えさ) = ♣ (葉) … ㇿ (かたい) ω (やわらか)  
 Ψ (草) イネ (稲) … § (不思議) こんなに草を食べる  
 ♣ (小さな虫)  
 ⊕ (キュウリ) ⊕ (キャベツ) ⊖ (リンゴ)

〈第2段階〉  
 Ω (生きもの) = ♣ (カエル) Y (トカゲ) K (カマキリ)  
 ↓  
 ♣ (へビ) Ж (クモ) ♣ (鳥)  
 Ω (食べる)  
 ↓  
 E (えさ) = バッタ \*バッタの受難

〈第3段階〉  
 ⊕ (危ない) = バッタ  
 ↓  
 Я (逃げる)  
 ↓  
 ➤ (飛ぶ) … ✓ (翅) or M (ジャンプ) (… § (不思議) バッタの後ろ足はなぜ長い)  
 → Y (トカゲ) K (カマキリ) Ж (クモ) 等につかまる  
 ▲ (木) にのぼる

… ♣ (いのち) 全 (守る) \*次時の追究課題

## 事例② 6月16日の授業

↓

(バッタは) ♣ (いのち) 全 (守る) ため  
 Ж (クモ) Y (トカゲ) K (カマキリ) 等から

Я (逃げる) ➤ (飛ぶ) … ✓ (翅) or M (ジャンプ) … A (ショウリョウバッタ)  
 ↑ ↓ ✓ (翅) ない?  
 VS 逃げて Ж (クモ) 等がいる → それは T (たまたま)  
 ↓

Σ (隠れる) III (草むら) Ψ (草) ■ (岩) ▲ (木) ⊙ (バッタの巣)  
 ↓  
 バッタと同じ ◇ (色) → Φ (見つかる) Ж (クモ) 等に  
 ♣ (忍者) のように ㇿ (歩く)

… ♣ (いのち) 全 (守る) \*次時、図鑑・本で確認

事例① 福岡県S小学校2年 K先生指導 生活科「しげんの生きものたんけん」 2005年6月15日

発 言 順 号	授業における発言の一部																					分 節	各分節での主要な言葉					
	T	F	Y	M	A	S	H	N	Y	U	G	S	S	U	H	K	A	M	T	T	K		A	F	N	S	K	C
1																											教師	E
2																											教師	E
3																											教師	E
4																											教師	E
5																											教師	E
6																											教師	E
7																											教師	E
8																											教師	E
9																											教師	E
10																											教師	E
11																											教師	E
12																											教師	E
13																											教師	E
14																											教師	E
15																											教師	E
16																											教師	E
17																											教師	E
18																											教師	E
19																											教師	E
20																											教師	E
21																											教師	E
22																											教師	E
23																											教師	E
24																											教師	E
25																											教師	E
26																											教師	E
27																											教師	E
28																											教師	E
29																											教師	E
30																											教師	E
31																											教師	E
32																											教師	E
33																											教師	E
34																											教師	E
35																											教師	E
36																											教師	E
37																											教師	E
38																											教師	E
39																											教師	E
40																											教師	E
41																											教師	E
42																											教師	E
43																											教師	E
44																											教師	E
45																											教師	E
46																											教師	E
47																											教師	E
48																											教師	E
49																											教師	E
50																											教師	E
51																											教師	E
52																											教師	E
53																											教師	E
54																											教師	E
55																											教師	E
56																											教師	E
57																											教師	E
58																											教師	E
59																											教師	E
60																											教師	E
61																											教師	E
62																											教師	E
63																											教師	E
64																											教師	E
65																											教師	E

発言番号	授業における発言の一部																					各分節での主要な言葉		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	分節	教師	子ども
66																						3		
67																						3		
68																						3		
69																						3		
70																						3		
71																						3		
72																						3		
73																						3		
74																						3		
75																						4		
76																						4		
77																						4		
78																						4		
79																						4		
80																						4		
81																						4		
82																						4		
83																						4		
84																						4		
85																						4		
86																						4		
87																						4		
88																						4		
89																						4		
90																						4		
91																						4		
92																						4		
93																						4		
94																						4		
95																						4		
96																						4		
97																						4		
98																						4		
99																						4		
100																						4		
101																						4		
102																						4		
103																						4		
104																						4		
105																						4		
106																						4		
107																						5		
108																						5		
109																						5		
110																						5		
111																						5		
112																						5		
113																						5		
114																						5		
115																						5		
116																						5		
117																						5		
118																						5		
119																						5		
120																						5		
121																						5		
122																						5		
123																						5		
124																						5		
125																						6		
126																						6		
127																						6		
128																						6		
129																						6		
130																						6		
131																						6		
132																						6		
133																						6		
134																						6		
135																						6		
136																						6		
137																						6		
138																						6		
139																						6		
140																						6		
141																						6		
142																						6		



発音番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	授業における発音の一部	各分節での主要な言葉		
発音番号	T	F	Y	Y	T	H	N	Y	U	G	S	U	H	K	M	T	T	K	F	N	N	C	教師および子ども	教師	子ども
143																							Ｔくんは質問が	6	(前表に記載)
144																							ＹＡくん		
145																							だれかを押しに行くときも		
146																							わかりません		
147																							あたりがすごいです		
148																							質問があります		
149																							低くなったらどう思うと思う		
150																							ジャンプして逃げると思います		
151																							Ｔくんは質問が		
152																							ＹＵくん		
153																							カマキリにつかまったら		
154																							わかりません		
155																							あたりがすごいです		
156																							おたすげマン		
157																							ＹＡくん		
158																							すきなみで逃げれば		
159																							カマキリにはとげがある		
160																							バッタのほうがスピードが速い		
161																							カマキリのほうがかまが強い		
162																							かまきりが飛んできます。手が		
163																							空中でジャンプはできない		
164																							かまをなかなか捕まにくい		
165																							その脚は速いからなんです		
166																							どうやってキャッチをする		
167																							おたすげマン		
168																							もっと速くスピードを出せば		
169																							スピードを出しても、速いのか		
170																							どうもしない		
171																							それでいいですか		
172																							ちょっと待って クモのこの脚	7	○ × △ ◎
173																							逃げられん		
174																							もう、逃げられんよね		
175																							例えば飛ごっこ 先に打たれた		
176																							つかまらないようにしている		
177																							ほかに こんな逃げ方してる		
178																							ゴキブリが早く クモの脚に		
179																							危ないと思って飛んで		
180																							クモ なんでもバッタをつかま		
181																							え、ＹＵくんがいいのを		
182																							ジャンプに失敗してクモの脚に		
183																							ジャンプして逃げて失敗して		
184																							はい		
185																							ＦＭちゃんがＹＵくんは質問が		
186																							どうぞ		
187																							バッタは固いんですか？		
188																							あるばい トノサマバッタ		
189																							ジャンプ ちよっと腿が動く		
190																							逃げ方 ジャンプして逃げ逃げる		
191																							ほかに何かこんな逃げ方は		
192																							バッタは、ジャンプして飛ぶ		
193																							これといっしょやね、そして		
194																							飛ぶ		
195																							そやね、はい		
196																							木にのぼって行く		
197																							木にのぼって		
198																							木にのぼって		
199																							木にのぼってってっぺんまで		
200																							これはどういうことなんですか	8	◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
201																							ね、自分の？		
202																							いのち		
203																							自分のいのちを		
204																							守る		
205																							自分のいのちをどうやって守る 「あのねよう」に書いて たくさん読んでいる 書けると 先生とってもうれしいです バッタのいのちを守り方を考え		

\*本授業で出された主要な言葉の記号(出現順)

- |          |        |         |
|----------|--------|---------|
| ○…生きもの   | ◎…小さな虫 | △…木     |
| ◎…食べ(る)  | ◎…キュウリ | ◎…いのち   |
| E…えさ     | ◎…キャベツ | ◎…守(る)  |
| △…かだい    | ◎…リンゴ  | ◎…飛(ぶ)  |
| ◎…葉(っぱ)  | ◎…不思議  | ◎…危(い)  |
| ◎…やわらか   | ◎…カエル  | ◎…指(はね) |
| ◎…イヌ     | ◎…トカゲ  | M…ジャンプ  |
| ◎…草(草の類) | K…カマキリ | 只…逃げる   |

\*氏名欄に・印があるのは女兒(推測含む)







